

事業名	貝毒調査(漁場環境監視等強化対策事業)
予算区分	国補, 県単
事業実施期間	昭和54年度～
担当者	(環境増養殖担当) 朝田健斗, 嵐俊右
共同研究機関等	

### <目的>

特定有毒プランクトンに起因する二枚貝類の毒化実態を把握し、貝類の食品としての安全性を確保するとともに、漁業や県民等への被害の未然防止を図る。

### <方法>

本県の沿岸11海域(播磨灘, ウチノ海, 鳴門市中央部, 松茂, 徳島市, 小松島, 阿南市(中部沿岸, 橘湾, 椿泊湾), 海部郡(北部, 南部))及び小型底びき網漁場2海域(播磨灘, 紀伊水道)の計13海域(図1)を調査対象海域として設定し、貝毒原因プランクトンの出現状況のモニタリングとカキ等二枚貝の貝毒検査を実施した。

プランクトンモニタリングでは、麻痺性貝毒原因種として*Alexandrium pacificum*(Group IV), *A.catenella*(Group I)及び*A.tamiyavanichii*, 下痢性貝毒原因種として*Dinophysis acuminata*及び*D.fortii*の出現を調べた。また、貝毒検査は一般財団法人食品環境検査協会に依頼し、その可食部における毒量を検査した。

### <結果>

令和3年度における貝毒による出荷自主規制状況及び原因プランクトンの出現状況を表1に示した。4月には小松島市で*A.pacificum*(Group IV)と*A.catenella*(Group I)が混在して出現し、最高細胞密度は0.08cells/mlと低密度であったものの、麻痺性貝毒が最高で5.7MU/g検出された。6月には松茂, 徳島市, 小松島市, 椿泊湾で*A.pacificum*(Group IV)(松茂は形態観察のみ)が発生し、最高細胞密度は31.3cells/mlで、麻痺性貝毒は最高で13MU/g検出された。1月には椿泊湾で*A.pacificum*(Group IV)と*A.catenella*(Group I)が混在して出現し、最高細胞密度は2.3cells/mlと低密度であったものの、麻痺性貝毒が最高で23MU/g検出された。3月には橘湾と椿泊湾で*A.pacificum*(Group IV)と*A.catenella*(Group I)が混在して出現し、最高細胞密度は0.56cells/mlと低密度であったものの、麻痺性貝毒が最高で7.2MU/g検出された。なお、本規制は3月末時点において継続中である。

### <今後の課題>

特になし

### <次年度の計画>

令和3年度と同様

### <結果の発表・活用状況等>

特になし



図1. 調査海域(沿岸11海域)

表1. 令和3年度における貝毒発生状況

出荷自主規制期間	海域	検査貝種	最高毒量(MU/g)	原因プランクトン	最高細胞密度(cells/ml)
4/30~5/24	小松島市	カキ	5.7	A.pacificum(Group IV) A.catenella(Group I)	0.08
6/10~7/8	松茂	カキ	4.6	At.complex(1B) A.cate nella	10.6
6/10~7/15	徳島市	カキ	13	A.pacificum(Group IV)	3.0
6/10~7/1	小松島市	カキ	10	A.pacificum(Group IV)	24.6
6/10~7/1	椿泊湾	カキ	4.9	A.pacificum(Group IV)	31.3
1/17~3/4	椿泊湾	カキ	23	A.pacificum(Group IV) A.catenella(Group I)	2.3
3/24~継続中	橋湾	カキ	6.2	A.pacificum(Group IV) A.cate nella(Group I)	0.34
3/30~継続中	椿泊湾	カキ	7.2	A.pacificum(Group IV) A.catenella(Group I)	0.56